1920年代における マルクス主義の受容と社会科学文献

大和田 寛

はじめに

- 1 社会政策から社会問題・社会科学へ
- 2 1920年代の「講座」と辞典
- 3 1920年代の社会科学系雑誌

はじめに

「私の大学を卒業した大正9年は,それが未曾有の大恐慌に見舞われた年として記憶される年である。このような変化に応じて思想界にも種々新しい現象が現われた。大正7年の末,東大には新人会という団体が出来た。『改造』——すでにこの名が当時の社会にとって象徴的である——が創刊されたのは大正8年のことであったと思う。同じ年にまた長谷川如是閑,大山郁夫氏等の『我等』が創刊されている。主として『中央公論』によった吉野作造博士の活動が注目された。これらの雑誌は私も見ていたので,ある大きな波の動きが私にもひしひし感じられた。京都はまだ比較的静かであったが,『貧乏物語』で有名になられた河上肇博士が次第に学生たちの注目を集めていた」(1)。

三木清は1920年(大正9)前後の時代の空気を、20年後に描いている。

第1次世界大戦に勝利した日本は、工業において飛躍的な発展を遂げ、アジア市場を独占するにいたった。その一方、工場労働者も大きく増加したが、インフレ政策の中で、労働者の生活は相変わらず苦しく、労働争議なども増大していった。このようななか、思想界でも徐々に変化が生じ始めていた。吉野作造が民本主義を唱えたのが1916年、河上肇の『貧乏物語』の刊行が1917年(大阪朝日新聞での連載は1916年)、そして1918年には米騒動が起きる。この社会状況を背景として、1919年には、三木が言う『改造』・『我等』といった雑誌の発刊があり、また河上肇の個人雑誌『社会問題研究』が創刊される。その年は、次節で見るように、東京帝国大学、京都帝国大学の経済学部が誕生し、大原社会問題研究所や協調会が設立された年でもあった。

従来の戦前日本についての社会科学史あるいは経済思想史の研究は、1930年代の日本資本主義論 争を中心に進められてきたといっても過言ではない。それより以前の1910年代・1920年代(明治末

⁽¹⁾ 三木清『読書遍歴』(『三木清全集』第1巻,岩波書店,1966年,所収)405-6ページ。

期から大正時代)の研究は、初期社会主義から大逆事件、その後の「冬の時代」を経て大正デモクラシーという流れで、社会思想史的な研究として進められてきたといえる。経済思想史的な研究では、社会政策学会から河上肇の経済思想へ、という流れで研究が進められてきた感がある。勿論それはそれで理由のあることではあった。

ともあれ、1910年・1920年代の社会思想・経済思想の流れのなかから、1930年代の日本資本主義論争とそれに結びつく社会科学の発展が生まれてくるのではあるが、そのプロセスは単線的なものではない。明治以降の近代化は、ある意味では庶民のあるいはインテリの「社会」の認識の過程であり、又「社会問題」・「労働問題」の自覚化・対象化の過程であるが、その過程で日本に独自の仕方での西欧の社会思想・経済思想の「導入」・「受容」があった。そのひとつがマルクス主義であった。社会の認識、社会問題の認識、社会問題の解決への模索が社会科学だとすれば、それはマルクス主義が唯一無二のものではない(ここではマルクス主義を、社会的実践=運動変革の理論としてではなく、とりあえず社会認識の方法、と理解している)。その意味では1920年代は、種々の社会思想・経済思想のなかから、社会認識の方法としてマルクス主義が、試行錯誤を繰り返しながら選ばれていく過程だともいえる(2)。

今回共同研究者の久保氏が扱う『日本マルクス主義文献』は、この1920年代の文献を集めたものである。とすれば筆者のここでの仕事は、直接的にはこの『文献』作成の舞台裏である大原社会問題研究所、またその発表場所である当時の出版物としての「講座」、当時の社会人文系雑誌を渉猟しながら、上記の試行錯誤の現場レポートを試みることである。そのことはある意味では、1930年代の日本資本主義論争の前史にすぎなかった1920年代に、多少とも光を当てることでもあろう。

なおここで、便宜上1920年代として論じているが、そして『日本マルクス主義文献』がカバーしているのは1919年から1927年であるが、行論上1919年から1930年ぐらいを対象とすることになる。

1 社会政策から社会問題・社会科学へ

近代日本において、社会問題・労働問題が本格的に論じられるようになったのは、日本資本主義が確立した、明治30年頃といってよいであろう。ひとつは、在野の社会主義者や自覚的な労働者によって、もうひとつはアカデミズムのなかから。前者の指標としては、1891年(明治24)創立の片山潜、幸徳秋水らによる社会主義研究会や1899年(明治32)に出された横山源之助の『日本の下層社会』を、後者については、1896年(明治29)に創立した金井延らによる社会政策学会(3)を挙げることができよう。

金井延は1886年から1890年までドイツ・イギリスに留学し、ドイツのベルリンではシュモラーや

⁽²⁾ 石田雄は、「『社会』の中心問題としての「社会問題」の研究が大勢としてマルクス主義の方法に行き着いたとき「社会科学」の名称もマルクス主義を意味するようになったとしている。『日本の社会科学』東京大学出版会、1984年、105ページ。

⁽³⁾ 社会政策学会については、とりあえず、住谷悦治『日本経済学史』(ミネルヴァ書房、1958年)や関谷耕一「社会政策学会小史」(『社会政策学会史資料』御茶の水書房、1978年、所収)を参照。

ワグナーについて学び、そこでドイツ歴史学派の労働問題への取り組みをつぶさに見ることとなった。帰国後彼は、帝国大学法科大学の経済学担当の最初の教授のひとりとして、日本に社会政策思想を植えつける先駆的な役割を果たした。1896年4月、彼の下で育った桑田熊蔵・山崎覚次郎の呼びかけに小野塚喜平次や高野岩三郎らが応じて、研究会を始めたのが、社会政策学会のはじまりであった。しかし会員が一堂に会して学術発表を行う「大会」を始めたのは、それから11年後の1907年(明治40)12月であった。その第1回大会では、『工場法と労働問題』をテーマに選んでいる。

明治末期の社会主義や労働運動は、大逆事件(1910年)以降「冬の時代」を迎えるが、世界大戦後の大正デモクラシーの動きやロシア革命、米騒動によって、再び少しずつ動き始める。

アカデミズムの側では、当時としては経済学の事実上唯一の学会であった社会政策学会は、1924年(大正13)の第18回大会を最後に自然消滅してしまう。関谷は「学会内部に極めて明瞭な、思想上・学問上の対立を生じ」(4) たからだとしているが、それは労働組合をめぐる問題、社会主義者の会員をめぐる問題であった。現在の学会に対する基本的通念からすれば、それが思想的・学問上の対立のない一枚岩である必要は全くない、と考えられるのだが。当時の社会政策学会が持っていた社会的役割と、それが新しい時代にそぐわなくなってきたことの証とも言えよう。

これより先に、東京帝国大学法科大学は1919年(大正8)4月に経済学部を独立させた。また同じ年一ヶ月遅れで京都帝大も法科大学から経済学部を分離している。そして同じ年大原社会問題研究所が開設される。東京帝国大学経済学部と大原社会問題研究所の歴史については、『東京大学経済学部五十年史』と『大原社会問題研究所五十年史』に、それぞれ述べられているので、敢えて言及しないが、この二つの学部・研究所の誕生は、単なる学部や研究機関の誕生を意味するだけでなく、上記の新しい時代の要請であり、大内兵衛の言葉を借りると、まさに「経済学の国家学からの独立」(5)であった。そして、そのことに大きく貢献したのが高野岩三郎であった。

高野岩三郎は、この時期の日本を代表する社会科学者である。その意味で、大内兵衛が、河上肇と福田徳三と並べて、高野岩三郎を『日本経済学の三星』と呼んでいるのは、正鵠を得ているといえよう。「はじめに」でも述べたように、1920年代の日本の社会科学史の研究が、河上肇に集中していて、福田徳三や特に高野岩三郎の研究が少ないのは、望ましいことではない(それでも、最近の社会福祉との関連で、福田徳三の「生存権の社会政策」が議論され、大原社会問題研究所の研究との関連で高野岩三郎が議論の俎上に上り始めてはいる)。

高野岩三郎については、遺稿集『かっぱの屁』(法政大学出版局、1961年)があり、また伝記として、大島清『高野岩三郎伝』(岩波書店、1968年)がある。後者によりながら、また前者も参看しながら、彼の経歴を簡単に見ておこう。彼は1871年(明治4)に長崎県に生まれ、1895年(明治28)東京帝国大学法科大学政治学科を卒業後、大学院で金井教授の下で、「労働問題を中心とする工業経済学」を専攻する。当時は労働争議が頻発し、足尾銅山鉱毒問題も激化してくる社会状況であった。このようななかで既に述べた社会政策学会が生まれ、彼も創設メンバーとして学会の運営に当たる。この頃統計学の研究を始める。

⁽⁴⁾ 関谷, 上掲書, 295ページ。

⁽⁵⁾ 大内兵衛『高い山』岩波書店,1963年,8,48ページ以下。

この専攻を工業経済学から統計学に変更したことについて、のちに彼は「統計学を専攻とするまで」(1942年執筆、遺稿集『かっぱの屁』所収)を書いている。

「明治30年12月25日当時東大法科大学において、国法学の講座を担当せられた一木喜徳郎先生より私の将来につき懇切なる提言あり、これにもとづき即日同じく法科教授にして財政学ならびに統計学を担任せられた松崎蔵之助先生を訪い、さらに和田垣謙三先生、金井延先生にも相談し、その結果ついに大学院研究科の専攻科目を変更して統計学となすとした」(6)。彼が、この専攻科目の変更について日付を正確に示しながら説明したのには理由があった。「かような専攻目標の変更はいかにも私に学問的誠心なく、単に眼前の便宜にもとづくように思えるけれども、それは必ずしもそうではないとみずから弁護し得ると思う」として、「私は元来実証的なる調査研究を好んでいた」ことを力説して、一高生時代のレポート「本邦古代貨幣史略」と、法科大学生時代の御雇い外国講師ウェンクステン先生のゼミナールに提出した「当時の東京の貧民窟の状態」のレポートEast London in Tokyoを挙げ、後者はその英文レポート全文を、その「統計学を専攻とするまで」のなかで復刻している。そして次のように結論する。「かくのごとく学生時代において実地調査に興味を感じ、社会的統計研究にも幾分手を染めてひそかにみずから恃むところなきにしもあらずという心境にあったので、前に述べたように、先輩諸教授の勧誘を感受して、統計学を専攻することにしたのである。」

この文章は、高野岩三郎という人間と彼の統計学を考える上で、大変興味深いものである。というのは、大学院時代にその専攻を変更したことに対して、『高野岩三郎伝』にあるように、当時彼に対して、「学問的良心がなく」「軽薄な学界出世主義の輩」とする誹謗中傷があったか否かは定かではないが、彼はこのことに拘りを持っていたことは確かであろう。しかしそれは、その非難に対して小心翼々としていたということではなく、むしろその反対であろう。その専攻科目の変更が、自己の学問志向から言っていわば必然的なことであったことを、過去の自分のレポートという事実に遡って、自ら検証しようとしているように思われる。彼は後の1919年の国際労働会議の代表をめぐるトラブルから、東大教授を辞任した事実からも知られるように、出所進退にも何事にも極めて誠実な人間であった。だから専攻変更の件も、半世紀近く経ってからも忘れず、というよりどこかで書いておきたいという、積年の宿題を果たしたといえるのではないだろうか。

もうひとつは、彼の統計学が、まさに統計学の方法に終始することなく、まさに社会の実態を把握する学問であること、そしてその関心が庶民や労働者の生活に向けられていることが、上記の学生時代のレポートに既に色濃く示されていることである。いわゆる高野統計学が社会統計学であることを、若き日のレポートは示しているといえる。

彼は1899年29歳でドイツに留学し、ミュンヘン大学でブレンターノから経済学を、マイヤーからは統計学を学んでいる。同時期に福田徳三もミュンヘン大学に留学中で、机を並べてブレンターノ教授の講義を聞いたとされる。福田が終生ブレンターノ教授を師と仰いだのに対し、高野はマイヤーに人間的にも学問的にもシンパシイを感じたようである。

1903年に帰国した後、彼は東京帝国大学法科大学で、『統計学』講座の最初の教授として教壇に

⁽⁶⁾ 上掲, 遺稿集『かっぱの屁』64-65ページ。

立つ。そのかたわら、彼は日本の庶民(労働者・生活者)の実態の調査研究が立ち遅れていることを痛感する。ちょうど帰国した年に、農商務省の『職工事情』が出され、それより先の留学直前には横山源之助の『日本の下層社会』が出ている。しかし大学に籍をおく経済学者たちは、欧米の経済学説の導入とその祖述に明け暮れ、社会政策学会に集まる学者たちも、労働問題を論じても実態調査にまでは踏み込まなかったのである。横山は片山潜とともに、兄である高野房太郎の労働組合期成会の運動上の友人であり、『労働世界』の編集者であったから、『日本の下層社会』から大きな刺激を受けたと思われる(すでに見たように、横山の著作より数年前に、学生時代のレポートではあるが、「東京の貧民窟の状態」について書いていたことを想起)。

その後彼は、1916年に『東京ニ於ケル20職工家計調査』、1918年には『月島調査』を行うが、明治大正期の労働者の実態調査としては画期的なものである。この二つのレポートには、様々な評価があるが、ここでは高野が社会の実態から学ぶ姿勢を確認したい。それは、彼の作った大原社会問題研究所についてもいえる(**)。彼は、統計学者・社会問題研究者であるだけでなく、当時としては極めて珍しい社会問題研究、社会科学研究のオルガナイザーでもあった。彼や大原社会問題研究所の周辺から、以下に見るように『講座』、辞典、雑誌が生まれてくるのである。

2 1920年代の「講座」と辞典

社会科学系の戦前の「講座」というと、日本資本主義論争のきっかけとなった岩波書店から出た『日本資本主義発達史講座』全7巻(1932-33年)があまりに有名であるが、岩波書店の人文社会系の「講座」としては、『岩波講座 世界思潮』全12巻(1928-29年)についで、二つ目の「講座」である⁽⁸⁾。しかしこの『日本資本主義発達史講座』(以下、『発達史講座』と略記)以前に、社会問題・社会科学系の「講座」が幾つか出ている。それは以下の4点である。

- ①大宅壮一編『社会問題講座』全13巻(新潮社,1926-27年),
- ②河上肇・大山郁夫監修, 政治批判社編輯『マルクス主義講座』全12巻(上野書店, 1927-29年)
- ③ 『社会経済体系』全20巻(日本評論社,1926-1928年)
- ④『社会科学講座』全15巻(誠文堂, 1932-33年)

そのほかには、『経済学全集』全67冊(改造社,1928-1934年)がある

このうち、改造社版『経済学全集』は、「講座」と同列には論じられないが、一応挙げておきたい。既に見たように、改造社は1919年に雑誌『改造』を創刊したが、そこで得た人脈を動員して、

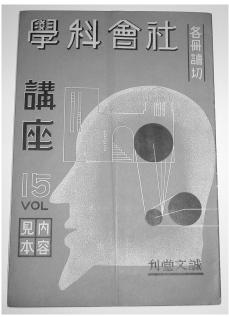
⁽⁷⁾ 大原社会問題研究所の誕生,そこでの高野の役割については前掲『大原社会問題研究所五十年史』,および, 高橋彦博『戦間期日本の社会研究センター 大原社研と協調会』柏書房,2001年 が詳しい。

⁽⁸⁾ 厳密にいうと、岩波書店では、この『日本資本主義発達史講座』は『岩波講座』のカテゴリーには入れていない。戦後の『日本資本主義講座』(1953-55年)や大塚久雄他編の『西洋経済史講座』(1960-62年)、川島武宜編の『法社会学講座』全10巻(1972-73年)も同様である。つまり、例えば「大塚史学」や「川島法社会」といった特定の「学派」の体系的集団労作は、「講座」ではあるが『岩波講座』ではないのである。









『経済学全集』全67冊を、1928年から1934年の7年の歳月を掛けて出版した。その「内容見本」によると、当初は全47巻の予定でスタートした。第1回配本は、福田徳三『経済学原理』、第2回配本は、河上肇『経済学大綱』で、この二人を看板として読者を集めたためか、1冊1円という値段のためか、予想以上の売れ行きとなった。そのこともあるのか、最終的には100名を超える執筆者による全67冊の大全集として完結した。いうなれば、改造社が得意とする円本の「社会科学」版とすることも出来る。現在では、この時代(1920年代)の経済学・社会科学の問題状況と研究水準を

示してくれる, 貴重な資料といえよう。

さてこの改造社の『経済学全集』に先駆けて出されたのが、①~②の「講座」である。

まず、大宅壮一編『社会問題講座』全13巻(新潮社、1926-27年)を見てみよう。これは、若き大宅壮一によって編集された、恐らく社会科学系の出版物で「講座」という名を冠した最初のものではないだろうか。

本来文学系の出版社である新潮社がこの講座を出すことになったのは、河盛好蔵執筆の『新潮社70年』(新潮社,1966年)によれば、次の通りである。高畠素之の『社会問題辞典』や『資本論』の翻訳を出す予定だった出版社が、印刷所と共に震災のため焼けてしまい、8月に竣工したばかりの鉄筋コンクリート4階建ての社屋が無事だった新潮社に、話が持ちこまれたというのである(ちなみに9月1日は、新社屋落成記念祝賀会の当日で、その準備のさなかに震災が起こったのであった)。このときの高畠との関わりで、新潮社は、1924年に高畠と北玲吉の編集で『社会哲学新学説大系』全21巻を出す。この成功が、『講座』の企画に繋がったようである。しかしこの『講座』のなかで高畠素之は「マルキシズム概説」を執筆しているものの、この『講座』自体は高畠の枠にとどまらない、大きな出版企画となった。『講座』の構成も当時としては斬新で、量的にも菊版で各巻350ページを超える大冊である。

『講座』の『内容見本』のパンフレットには、「発刊の趣旨」が述べられている。社会問題の発生とその問題の範囲の広汎さ・題目の複雑さを述べた上で、「小社ここに看るところあり、すなわち本講座を発刊して初学者の為には社会問題全般に亙り正しく輪郭を与え、更に、専門家及び実際運動家の為には、より深い理解に導くべき最高最新の学説を紹介し、他に求め難き貴重な資料を提供する。いはば、本講座は、大学の講座と、学者の書斎と、公私立各研究所との一大聯合である」と、その意気軒昂なところを示している。

更にその「本講座の諸特色」のなかで、まず少壮研究者を集めてその編成の原案を作り、その上で、高野岩三郎、堀江帰一、安部磯雄、森戸辰男氏等へ校閲監修を願った経緯を明らかにしている。また大原社会問題研究所、産業労働調査所との密接な協力関係についても述べている。実際、大原社研からの執筆陣には、高野の他、森戸辰男、大内兵衛、櫛田民蔵、久留間鮫造、権田保之助、大林宗嗣の名前が挙げられ、後者所属の執筆者には、野坂鉄(参三)、野呂栄太郎、猪俣津南雄、浅野晃が入っている。また「世界労働運動発達史」「各国無産政党の現勢」等の項目は、個人名こそないが産業労働調査所が執筆者となっている。また全巻、産労の手になる「わが国現勢図表」が巻頭を飾っている。更に第13巻を除くすべての巻に「社会問題文献解題」がある。執筆者は特に明記されていないが、大原社研の内藤赳夫か森戸辰男である可能性は高い。

⁽⁹⁾ ちなみに、何時作られたのか奥付もないため不明であるが、これらの13冊を4巻に合本したものを、筆者は以前古書店で入手し所蔵しているが、いずれも1000ページを超える重厚なものになっている。恐らく、『講座』完成時に、新潮社で関係者に配ったのではないかと想像している。第1巻「社会思想篇」第2巻「社会運動篇」、第3巻「社会科学篇」第4巻「社会学及び雑録」という構成になっている。又、各巻の「科外講話」「図表」「雑録」(社会問題文献解題、社会問題年表など)を一冊にしたもの(1927年刊)も出ている。

上記監修者の他にも、吉野作造、長谷川万次郎(如是閑)、北澤新次郎、大山郁夫、杉山元治郎、平林初之輔といった大正デモクラシー期を代表する学者・思想家・評論家、運動家たちが、『講座』に執筆している。

ただこの『講座』に対する細川嘉六らの『日本社会主義文献解説』の評価は高くない (10)。「本講座は、思想的特色とみなしうるものはない。当時の社会運動家、思想家を網羅した」だけで、「当時の社会主義運動の一般の様相をうかがい知ることができる」が、研究としてはその水準は高くないと言いたいのだろう。しかしその一方で「注目すべき論文」として、野呂栄太郎「日本資本主義発達史」や服部之総「社会階級論」、猪俣津南雄「帝国主義論」、櫛田民蔵「商品価値の批判序説」、大山郁夫「無産政党論」、赤松克麿「日本労働運動発達史」、木村毅「日本社会主義史」等、30編ほどを挙げている。これだけ評価できる論文があれば、この『講座』を実質的に評価していることにはならないのだろうか。波多野鼎「社会思想史発達史」、河田嗣郎「資本主義と農政問題」なども、上記赤松克麿、木村毅の論文と並ぶ大作である。

次に,河上肇・大山郁夫監修,政治批判社編輯『マルクス主義講座』全12巻(上野書店,1927 – 29年)を見てみよう。

この『講座』は、雑誌『政治批判』を出していた政治批判社が編者となっている。『政治批判』は、1927年2月から1929年まで、大間知篤三・水野成夫らの編集で出ていた。河上肇によれば、この雑誌は、雑誌『マルクス主義』と姉妹雑誌の関係にあり、「後者は主として基礎理論に関する論説を載せ、前者は主として時事問題を取り扱った論文を載せるという大体の分業」(11)の下に編集されていた。創刊当時は福本イズムの色彩が強い雑誌であった。事実、後に民俗学者として一家を成した大間知篤三は、この雑誌の第2号に大宮啓二の筆名で「学生運動の新発展段階」というまさに福本イズムそのものといえる論文を書いている(12)。

だから、この講座企画について「大山郁夫氏とともにこの講座の監修者になってくれ」との依頼があったときに、河上は最初断っている。しかし結局は監修者になることを承諾する。そのことを彼は、マルクス主義講座の『内容見本』のパンフレットの「マルクス主義講座の計画に参加するについて」(13) のなかで書いている。ちなみにこの講座にかかわって、河上が書いたもうひとつの原稿「推薦文」は、河上肇が京都帝大を辞める直接的なきっかけとなった文章である(詳しくは、同巻の大野英二の「解題」を参照)。

ところで、この『内容見本』に示された内容(『講座』の全巻の構成)とその執筆者は、実際に刊行された『講座』の内容・執筆者と大きく異なっている。計画では、全体を12編に分け、第1篇は、マルクス主義哲学、第2篇はマルクス主義経済学、(中略)、第10篇は、明治維新史、日本資本主義発達史となっている。例えば、第2篇を例にとれば、河上の「マルクス主義経済学解説」のほ

⁽¹⁰⁾ 細川嘉六監修,渡部義通・塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説』大月書店,1958年,177ページ。

⁽¹¹⁾ 河上肇『自叙伝』(1), 岩波文庫, 1996年, 222ページ。

⁽¹²⁾ 鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち』人文書院,1998年,76-79ページ参照。

⁽¹³⁾ どちらも『河上肇全集』第16巻、岩波書店、1984年、に所収、428-432ページ、参照。

か、安田浩一郎の「賃労働」、櫛田民蔵「価値論」、猪俣津南雄の「帝国主義論」が予定されていたが、実際に書かれたのは、河上肇だけであり、「帝国主義論」は書かれたが、執筆者は細川嘉六に代わった。第10篇も、野呂栄太郎の「日本資本主義発達史」は書かれたが、明治維新史のところは、林二郎・高濱潔から服部之総に代わった(紙幅の関係でその異同を記すことは割愛するが、興味深いものがある)。

このように内容や執筆者に変更が多いのは、松島栄一も指摘するように、この講座が企画された (パンフレットが出された) 1927年11月という時期は、コミンテルンの『日本に関するテーゼ』い わゆる「27年テーゼ」の発表と重なり、全体の企画の見直しが生じたこと、刊行途中の1928年3月 に、いわゆる「3・15事件」があり、執筆予定者が逮捕されたことが考えられよう(14)。

この『講座』は、全体の構想としては、日本のマルクス主義の体系化を試みた面白い企画であったが、結局は中途半端なものになってしまった。しかし個別には、見るべき論文も幾つかあり、日本の社会科学史に正当に位置付けられるべきであろう。

次に、③『社会経済体系』全20巻(日本評論社、1926-1928年)を見よう。

この『体系』も、『社会問題講座』とほぼ同じ時期に出版されている。菊版で各冊400ページを超えるボリュームで20冊、量的には『社会問題講座』の2倍近い大講座となっている。両者がその販売部数を競い合ったことは想像に難くない。又両方に名を連ねている執筆者も少なくない。

内容見本のパンフレットによれば、当初の計画では18巻であった。それが2巻増の20巻となったのは、執筆者が増えたというより、一人一人の論文がかなり長いものが多いということである。例えば、第18巻に収録された福田徳三の「社会問題概説」は、92ページの長編である(もっとも彼の『経済学全集』第5巻からの転載ではあるが)。また、内容見本では、山田盛太郎「マルクス派社会主義」や福本和夫「レーニズム」の論文が挙げられていたが、それらは書かれることはなかった。しかし総じて、予定の執筆者は多少タイトルに変更はあっても、同様のテーマで書いている。ただ内容見本からは、全体の監修者が全く見えてこない。しかし『体系』は全体を、経済学、経済史、財政、経済問題、産業、資本主義社会の解剖、社会思想、社会問題、農村問題、等の15のテーマに分け、それぞれに10本前後の論文を配しているが、その各テーマの柱となる論文を複数書いている高田保馬、土方成美、本位田祥男の3人を、編者と考えることはできよう。

また内容見本では、宣伝用文句ではあるが、「社会科学の一切を総合せる本体系の如き他に類例ありや」と述べ、この『体系』をフランス革命期の百科全書に比定して、「フランス革命前に編纂された彼の百科全書は、19世紀欧州の動向を支配した。本体系の出現日本将来の帰趨に決定的の力を持つであろう」と自負しているが、量的な大きさが、内容の充実を示しているとはいえない。しかし『体系』にしろ『社会問題講座』にしろ、このような大部の講座の出版が、全巻予約で成立するところに、この時代の社会科学にたいする、時代のエネルギーを感じる。

⁽¹⁴⁾ 内田義彦・大塚久雄・松島栄一編『マルキシズム I』(『現代日本思想大系』20) 筑摩書房, 1966年, 15–16 ページ、参照。

最後に、④『社会科学講座』全15巻(誠文堂、1931-32年)に言及しておこう。これは、1930年代に入ってからの『日本資本主義発達史講座』と同時期の講座であるため、ここでは取り上げない予定であったが、以下の二つの理由で多少述べておきたい。

まず第一は、この『講座』は文字通り『社会科学』そのものを標榜する、戦前唯一の講座であるが、その存在が現在では全くといっていいほど知られていないことである。前掲の細川嘉六の『文献解説』でも全く言及されていない。高野岩三郎や森戸辰男が事実上の編集代表であろうと思われ、また他の大原社会問題研究所員も執筆陣に入っているにもかかわらず、である。具体的に言うなら、第1巻の巻頭論文「社会科学概論」を森戸辰男が書き、第5巻「統計学汎論」と第12巻「労働問題概論」は高野岩三郎、第13巻「財政学概論」は大内兵衛が書いているのである。それゆえ『高野岩三郎伝』の著作目録からもこの論文は落ちている(なお、大内論文は『大内兵衛著作集』第12巻の目録には入っている)。

大内はこの講座の件で、河野密からの話を伝えている。河野が「昭和4年頃なにか社会主義の講座を計画し」、安部磯雄、高野岩三郎先生に相談したというのである。遅れてきた「高野は懐から、メモを出していろいろ詳細なことまで指図をされ、そのおかげでその講座ができあがった」(15)。ここで社会主義の講座といわれているのは、時期から言っても、この3人が執筆していることからしても、『社会科学講座』のことであろうと考えられる。

第二に、この講座はなかなか水準が高くまたユニークな論文が幾つかあり、戦前文献として無視できないということである。この執筆陣は、次に見る改造社版『社会科学辞典』の項目執筆者と同じテーマで重なっている人が散見される。

次に経済学、社会科学関係の辞典についてみよう。1920年代から1930年頃までの辞典には次のようなものがある。プロレタリア辞典の類も幾つかあるが、ここでは取り上げないこととする。

- ①高畠素之著『社会問題辞典』(改造社,1925年)
- ②田所輝明編『社会運動辞典』(白揚社,1928年)
- ③杉森孝次郎編『社会科学辞典』(社会思想研究所,1925年)
- ④社会思想社編『社会科学辞典』(改造社、1930年、改訂縮刷版、1932年あり)
- ⑤大阪商科大学経済学研究所編『経済学辞典』全6巻(岩波書店,1930-32年,のちに追補版1巻,1936年あり)

参考までに、1930年以降の辞典として

島中雄三編『社会問題辞典』平凡社,1933年(同社,『社会思想全集』第40巻)

塚本三吉編『経済学辞典』改造社,1934年

森戸辰男監修『社会科学辞典』非凡閣,1934年(同社,『小辞典全集』第5巻) の3冊を挙げておこう。

本格的な経済学辞典としては, ⑤大阪商科大学経済学研究所編『経済学辞典』全6巻があり, 戦後

⁽¹⁵⁾ 大内兵衛,前掲『高い山』14ページ。

の岩波書店の『経済学辞典』に引き継がれている。高畠のものは、高畠一人で書いたという意味では、 画期的なものであり、すでに述べたように、新潮社から『社会問題講座』を出すきっかけになったと いう意味でも歴史的な意義を有するが、労働・工業関係に比較すると農業関係は手薄である。

一方, ④社会思想社編『社会科学辞典』(改造社, 1930年)は、一冊ものではあるが、B5版 1500ページの大冊である。雑誌『社会思想』を出していた新人会系の蝋山政道や平貞蔵、嘉治隆一らが編輯委員ではあるが、執筆陣には、帝大系の学者、大原社研の所員、農民運動・労働運動の運動家を含めて、150人ほどが入り、バランスのいい辞典となっている。次節で述べる、雑誌『我等』の延長上で出来た辞典といえるかもしれない(改訂縮刷版が1932年にでている)。例えば、高野は、「大原社会問題研究所」と「統計及び統計学」の項目を、大内は「財政及び財政学」と「財政史」を書いている。また、「福本イズム」という項目もあり、河野密が書いている。当時の日本の社会科学の実質を知るための第一級の資料である。

なお、塚本三吉編『経済学辞典』(改造社)は、改造社版『経済学全集』第56巻~58巻の「経済学辞典」上中下(1932-3年)の合本版である。

3 1920年代の社会科学系雑誌

1920年代は、未曾有の雑誌ブームの時代であった。

一般的に雑誌が創刊ラッシュを迎えるときは、時代の激動期であり、一般大衆のエネルギーが既成の秩序に抗する時であるといえる。日本の近代ではそれが過去に 3 回あった。まず大正デモクラシーから昭和初期の1920-30年代、そして 2 回目が第 2 次大戦後の1940年代後半の時代 (16)、そして 3 回目が最近何かと話題の「1968年」を起点とする1970年代前半の、所謂学生反乱の時代である。このような時代に生まれた雑誌は、まさに時代を映す鏡である。しかしそれだけに、すぐに廃刊に追い込まれる「3 号雑誌」であることも多い。そのためこの時期の雑誌で現在見ることが難しい雑誌も少なくない。

1919年に『改造』『我等』,そして河上肇の個人雑誌『社会問題研究』が相次いで創刊されたことは,既に見た。それに続いて幾つかの雑誌が,19年から20年にかけて創刊された。黎明会系の雑誌『解放』も1919年,協調会の『社会政策時報』は1920年に発刊されている。

その後1920年代創刊の雑誌に限っても、久保論文の『日本マルクス主義文献』のリストに出てくる雑誌が陸続と出てくる。代表的な雑誌の誌名のみ挙げておこう (17)。

新人会機関誌『先駆』20年,その後継誌『同胞』20年,またその後継誌『ナロオド』21年,新人会OBによる『社会思想』22年,建設者同盟機関誌『建設者』22年,大原社会問題研究所機関誌

⁽¹⁶⁾ 筆者も戦後雑誌の文献的考察を以前に発表している。大和田寛「社会科学系戦後雑誌小論」『仙台大学紀要』 (第40巻第1号, 2008年, 所収)。

⁽¹⁷⁾ この時期の雑誌を鳥瞰できるものとして、梅田俊英「大正デモクラシー期の左翼出版界」(『大原社会問題研究所雑誌』No.383, 1990年, 所収), 同「戦前社会運動機関紙の復刻」(同『大原社会問題研究所雑誌』No.400・401, 1992年, 所収) がある。地味ではあるが、このような基礎的な研究に負うところが大きい。

『大原社会問題研究所雑誌』23年,福田狂二『進め』23年,マルクス協会『マルクス主義』24年,日本フェビアン協会『社会主義研究』24年,産業労働調査所機関誌『産業労働調査時報』25年,改造社『社会科学』26年,鈴木茂三郎『大衆』26年,その後継誌,山川均『労農』27年,『政治批判』27年,日本評論社『社会科学研究』27年,福本和夫個人雑誌『マルクス主義の旗の下に』27年,『新興科学の旗の下に』28年,プロレタリア科学研究所機関誌『プロレタリア科学』1929年。

これらの雑誌創刊ラッシュの流れを作ったのが、1919年の総合雑誌『改造』の刊行であった。それは、新しい時代の到来を予感させた。当時『太陽』と『中央公論』が2大総合雑誌として君臨していた。『太陽』は、1895年(明治28年)1月に創刊、一方『中央公論』は4年遅れて1899年(明治32年)1月に世に出るが、これは、『反省会雑誌』という西本願寺系の若い僧侶たちの機関誌として1887年に創刊されたものが、改題したのであった(正確には92年に『反省雑誌』と改題している)。大正期になって、『中央公論』が吉野作造・大山郁夫の論文を載せ始めてからは、『太陽』は『中央公論』に差をつけられ、高級読み物と言われるに到った。このような状況で『改造』が出現し、『中央公論』と並んで、大正デモクラシーを代表する雑誌となっていくのである(18)。

また『我等』も、長谷川如是閑らの編集した大正デモクラシーを代表する雑誌で、30年に『批判』と改題して34年まで179冊を出す。この雑誌の創刊のきっかけは、長谷川らが『大阪朝日新聞』(これは、16年に河上肇の『貧乏物語』を連載したようなリベラルな新聞)の社の内紛でやめたことにある。その後「我等今何をなすべきか」を考え、この雑誌を始める。執筆陣に、朝日新聞の退社組(その一人に丸山幹治、丸山真男の父がいる)や同新聞の寄稿家である、河上肇、櫛田民蔵、吉野作造がいた。また大原社会問題研究所関係で、高野岩三郎、大内兵衛、細川嘉六、森戸辰男、さらに東大初期新人会のOBで『社会思想』の会員、嘉治隆一、三輪寿壮、細迫兼光らがいる。

ここでは紙幅の関係もあって全てに言及することが出来ないので、「社会科学」と名のつく雑誌、 改造社の『社会科学』と日本評論社の『社会科学研究』を見ておくことにしよう。両者に共通する のは、タイトルに社会科学がつくことではあるが、それ以上にどこかの機関誌ということではなく、 一般に市販されていた雑誌ということである。そしてそのことに関係があるのか、ほとんど問題に されてこなかった雑誌ということであろうか。

まず改造社の『社会科学』は、1925年6月に創刊され、29年9月まで24冊刊行された。創刊号は、 高田保馬、平野義太郎、本庄栄治郎、高柳賢三、野村兼太郎、らが執筆している。

特に創刊号によくある巻頭言はないが、編集後記で、「我誌の任務は旧学問を打破し、新人によりて、真の学的創成を今後に得ようとするにある」「本書は購読者の雑誌たることを希望しています」「尚ほ、本誌の執筆者には、全国の各大学の若手の教授、助教授の殆んど全部が承諾していただいたことは、本社の栄誉とするところであります」と述べ、特定の立場に立たない、開かれた雑誌であることが強調されている。この創刊号から第4号までは、普通に種々の論文が並び、各大学の紀要のような外観を呈していたが、第5号は、「形式社会学研究」と銘うたれ、ボリュームもそれ

^{(18) 『}中央公論』の歴史については、『中央公論の八十年』中央公論社、1965年(非売品)、『太陽』については、 鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』思文閣出版、2001年、を参考にした。

までの200ページ前後から360ページへと増大している。そしてこの後、特集が相次ぐ。特集号のタイトルを一応挙げておこう。第2巻第1号(25年12月)「マーシャル研究」、第2巻第7号(26年6月)「日本経済史研究」、第3巻第8号(26年10月)「唯物史観」、第3巻第1号(27年6月)「農村問題研究」、第3巻第2号(27年46月)「帝国主義研究」、第3巻第3号(27年8月)「理論闘争批判」、第3巻第4号(27年11月)「マルクス主義全解説」、第4巻第1号(28年2月)「日本社会主義運動史」である。



見られるように、「唯物史観」特集号あたりから、特集は、マルクス主義関係のものが中心になっていく。この号には、福本和夫が「我々はいま如何にして戦闘的唯物論を戦ひとり得るか」を寄稿しているが、次の「理論闘争批判」では、福本イズムが批判のまな板に載せられている。「日本社会主義運動史」特集の巻は、堺利彦、安部磯雄、木村毅、荒畑寒村、吉野作造、赤松克麿、山川均、河野密、佐野学らの論文が並び圧巻である。ボリュームも580ページと、超特大号と成っている。「マーシャル研究」特集号が、土方成美、向井鹿松、小泉信三、石川興二らの執筆陣であることと比べれば、180度の転換である。『改造』を擁する出版社であるから、執筆陣にさまざまな立場の人を登用することは可能であるが、売れ行きなどで、出版方針の転換等があったのであろうか。この辺謎が多いが、この転換によって現在も参照に値する雑誌になったともいえよう。尚、各号に「最近社会科学学界主要論文及著書解題」が掲載されており、現在では貴重なものとなっている。

もうひとつの『社会科学研究』は日本評論社から出ており、1927年2月から10月まで、3号で終わってしまった雑誌である。この執筆陣は、上記『社会科学』の初期の執筆陣と重なり、高田保馬、土方成美がいる一方、吉野作造や永井亨も寄稿している。日本評論社の出版として、同社の『経済社会大系』と連携させる目的があったようである。

(おおわだ・ひろし 仙台大学体育学部教授)

付記 本稿は [基盤研究C 課題番号21530185] 「日本社会科学の1920年代――日本資本主義論争前史の文献的研究――」の 研究成果の一部である。